

実践と社会的メカニズムの説明に向けて

後期 Wittgenstein の社会学的意義の再検討

宗像 冬馬

本稿は後期 Wittgenstein 思想の社会学的意義の再検討を試み、その中で自然主義解釈の社会学理論的展開の可能性を探る。そして自然主義と分析社会学を結びつけることを提案する。

後期 Wittgenstein の社会学的利用は、言語ゲーム概念と規則をめぐる諸考察に集中している。そこからいかなる理論や方法に繋げるかによって整理すると、大別して (1) 論理文法分析・概念分析の方法、(2) 意味のシステム論、(3) 言語ゲーム論、(4) コミュニケーションと他者の理論、(5) 実践と再生産の理論、(6) 自然主義の 6 つがある。そこには共通する論点がある。第一に、実践と規則の相互関係が基礎となる。第二に、実践が依存するコンテキストは多面的で複雑である。第三に、慣習的实践や規則の研究では意味と自然の領域が区別される。これらを基礎としつつ、実践／規則、理論／方法、意味／自然の区別のどこに着目するかで立場が分かれる。中でも、最も曖昧だが特異な視座を有する自然主義は、記述／説明の区別を導入すれば、説明を志向するものと見なせる。そして自然主義の社会学的位置づけの明確化とさらなる豊饒化の手段として分析社会学の視点が有望である。自然的・因果的メカニズムを説明する試みとして、後期 Wittgenstein の自然主義と分析社会学は手を取り合える。

キーワード：Wittgenstein, 自然主義, 社会的メカニズム

1 はじめに

本稿の課題は20世紀最大の哲学者と呼ばれる Ludwig Wittgenstein 後期思想の社会学的意義を再検討することである。Wittgenstein の思想は前期と後期——厳密には前期、中期、後期、晩期——に分けられるが、社会学者は主に後期思想を重視してきた¹⁾。それこそ現代の代表的な社会学者である Luhmann, Habermas, Giddens, Bourdieu, 全員が後期 Wittgenstein に言及している。そして Wittgenstein の社会学的利用は、論点上の共通点が存在する一方で、「理論／方法」「意味／自然」「記述／説明」等の区別に応じて着眼点が異なる。

本稿の主眼は後期 Wittgenstein の真意や解釈の正しさを裁定することではない。社会学者が彼の中に、また彼を通して、何を見たがっているかを検討することである。そのうえで、現状優遇されているとは言い難い或るアプローチへの注目を提案する。

Wittgenstein 後期思想に関する簡単な整理から始めよう。特に重要視されている論点は、「言語ゲーム」(Sprachspiel, language game) と「規則」(Regel, rule) のふたつである。

まず言語ゲームというのは、詳しく検討し始めれば議論が複雑になるが、イメージとしては、“語を使ったゲームとして言語を考えよ”という提案としておよそ理解できる。実際 Wittgenstein は、『言語ゲーム』という言葉で強調したいのは、言語を話すことも活動の一部、または生活形式の一部だということである」(PU 23) と述べている²⁾。後述するようにゲームと活動の違いや、ゲームの規則に関して議論の余地がありうるが、少なくとも言語を活動や生活の一部と見なすことが強調されているのは確かである。

次に規則については、これこそ最も解釈論争が絶えない論点のため、最大公約数的におそらく最も引用される箇所を引いておく。

我々のパラドックスはこうであった。規則は行為様式を決定できない。あらゆる行為様式は規則に一致させることができるから。その答えはこうであった。あらゆる行為様式を規則と一致させることができるのならば矛盾させることもできる。ゆえにそこには一致も矛盾もない。

ここに誤解があるのは、この思考過程において我々が解釈に解釈を重ねているということにすでに示されている。あたかもそれぞれの解釈が、

その背後にある別の解釈を考えるまでの少なくとも一瞬の間は我々を安心させてくれるかのようだ。つまりここに示されているのは、解釈ではない規則の把握が存在するということだ。それは適用の事例ごとに我々が「規則に従っている」や「規則に反する」と呼ぶ事柄の内に現れている。

それゆえ規則に従った行為は全て解釈だと言われる傾向にある。しかし規則の表現を別の表現へ置き換えることだけを解釈と呼ぶべきである。(PU 201)

それゆえ「規則に従うこと」はひとつの実践 (Praxis) である。そして規則に従っていると信じることは規則に従うことではない。それゆえ規則に「私的に」従うことはできない。さもなければ、規則に従っていると信じるのが規則に従うことと同じになってしまうから。(PU 202)

ここだけでも読解が一筋縄ではいかないとわかる。少なくとも、(1) 規則は行為様式を決定できないという常識や通念に反する考えが生じること、(2) その考えは規則遵守を解釈として捉えることに由来すること、(3) そのような誤解は、規則遵守を実践として捉え直すことで回避されること、このようなことが主張されていると読み取れる。また規則遵守が信じることでなく実践だとされていることがポイントである。それは心的出来事と実際の行動との関係を問題化している。

以上は、言語から言語のゲームへ、規則とその解釈から規則遵守の実践へ、というような標語に纏めることができるだろう。そして後期 Wittgenstein が言語や規則遵守の動的側面を強調していることがわかる。そこにさらに根拠への問いが結びつく。

「いかにして私は規則に従うことができるのか？」——この質問が原因を尋ねるものでなければ、それは私が規則に従ってこのように行為することの正当化 (Rechtfertigung) を尋ねていることになる。

私の根拠づけ (Begründungen) が尽きると、私は硬い岩盤に達したのであり、私のスコープは反り返ってしまう。すると私は、「とにかくこのように行為しているのだ」と言いたくなる。(PU 217)

こうして規則に従うことを根拠づけることの限界が示唆される。重要なのは、原因への問いと、正当化（ないし根拠づけ）への問いが区別されていることである。後述するようにこの区別は重大な論点となる。そしてこの根拠への問いは同時に、事実的一致が正しさを決めるのかという疑問へと繋がる。こう答えられる。「正しきや誤りは人間の言うことだ。言語において人間は一致する。それは意見の一致ではなく生活形式 (Lebensform) の一致である」(PU241)。ここは特に解釈が難しいが、少なくとも生活形式がひとつの基礎として提示されている。この点を踏まえると言語ゲーム概念もさらに複雑化してくる。

以上、多少強引に整理してきたが、これらの論点をいかに理解し、そこからいかなる理論や方法へ繋げるかという点で社会学者の見解が分岐していく。まず2節で社会学理論・社会学方法論における Wittgenstein 後期思想の援用法を整理する。3説でその考察を行い、それぞれの援用方法の違いがいかなる解釈の違いや着眼点の違いに由来するのかを論ずる。4節で或る社会学的問題を研究する上で自然主義が適切であること、そしてその理論と方法がどのようなものになりうるかを示す。

2 分類：社会学における後期 Wittgenstein

社会学における後期 Wittgenstein の援用法を整理する。ただし哲学上・文献考証上の解釈問題に踏み込むことは出来ないし、そのつもりもない。社会学における意義に焦点は限定される。そして解釈の違いという観点から整理はしない。解釈の違いを予め想定してしまうと、社会学理論・方法論上の立場と絡み合いながら、相違点が過剰に、類似点が過小に評価されかねないから。またここで取り上げるのは分類が可能な上で重要と思われる代表的な研究であり、包括的なものではありえない。だが解釈問題と社会学的意义が明確に区別されておらず、見取り図になりうるような整理が見当たらない現状では、暫定的な整理だとしても今後の研究にとって有意義だと考えられる。以上から Wittgenstein から引き出した主張と理論・方法論の結びつきの観点から整理する。

2.1 論理文法分析・概念分析・エスノメソドロジー

後期思想から理論の困難を受け取り、経験的研究の方法として定式化しようとする立場が現在強い支持を得ている。論理文法分析・概念分析を奉ずる立場である (e.g. Lynch 1993=2012; 前田 2005; 小宮 2011)。

代表として Coulter の主張を見よう。Wittgenstein の「理解」は心的過程ではないという主張 (PU 154-55, 180) や、「本質は文法の中にはっきり語られている」(PU 371) という主張——これらも規則遵守問題と決して無関係ではない——に基づき、コンテキスト抜きの思弁の不毛さが指摘される (Coulter 1979=1998: 76-80)。つまり、「行為や語られたことの相互理解が可能であるためには、共通の基盤として慣習がなければならぬように、わたしには思える」

(Coulter 1979=1998: 88) とされる。ここから方法論が導かれる。理解や意図などの基準は包括的に操作主義的に理論化できるものではない。「文化の成員たちは、その時々状況のうちで判断をしなければならない。つまり、コンテキストを分析することではじめて、何が、そのつど特定のばあいごとに、適切な帰属のための基準、表明の承認のための基準として数えられうるか、を知ることができる」(Coulter 1979=1998: 89)。その際、Wittgenstein にとっての「基準」は厳格な規則として理解すべきものではなく、場面に固有の事柄として理解すべきとされる (Coulter 1979=1998: 89-90)。こうして、研究者自身も文化の成員であることを踏まえた方法論である論理文法分析が提案されるのである。

この見解やその派生見解は Wittgenstein の思想を何らかの理論や概念を補強するためではなく、日常的な方法の記述という方法論を導く視点として利用する。規則遵守問題を一躍有名にした Kripke が、Wittgenstein は言語や概念形成の不可能性の問題を提起したと解釈したのに対し (Kripke 1982: esp. 55, 62)、概念分析の立場からすると、規則遵守問題が明らかにしたのは、そのような問題を見出すこと自体が不用で不適切ということなのである。このような主張の根底には、自然科学と社会科学の区別がある (cf. Winch 1990=1977)。自然的世界とは異なり、意味を介する人間の世界では規則が決定的な役割を果たしており、そして規則は社会的背景を前提とし、社会秩序の達成や把握にはその背景の理解が不可欠となる。すると、日常的に問題なく秩序立って暮らす人々の実践とその背景を無視して、外部から勝手に問題や概念を作るべきではない。観察者がすべきなのは観察対象の人々が営む社会的実践を記述し、そこで利用されている概念や理由を分析することである。Kripke のような懐

疑や無根拠性の強調は言語ゲームや実践を外部から観察することで生じた錯誤であり、実際にそこに参加している人々にとって問題など存在しない。こうして、Wittgenstein から受け継がれるべきは、文脈化された局所実践として規則遵守を捉え、同時に疑似因果的な規則観を捨て、実践に内在した記述という方法論を採用することとされる (e.g. Lynch 1993=2012; 河村 2013)。この立場は客観主義的視座を批判する意図を少なからず含み、規則や社会秩序の理論を疑問視するものである。

2.2 意味のシステム論

次に意味システム論に接続する援用法がある。

まずは Luhmann から、彼は断片的にしか Wittgenstein に言及していない。だが注目できるのは、社会システムの構造と過程の関係を、規則と規則に従う行為との関係になぞらえていることである (Luhmann 1993=2003: 42)。つまり自己言及的・自己準拠的システムの在り方を、Wittgenstein の規則に関する考察に重ねているのである。過程なき構造も構造なき過程もないというこの関係を、小宮は論理的相互構成関係と解釈している (小宮 2011: 74-5)³⁾。

この主張は、同じくシステム論の立場の今田 (1986) の利用法を見ることで補完できる。今田によると、行為者側の意味と社会側の制度について、一方が他方を決定するというかたちをとらずに結びつけるのが規則であり、だからこそ社会理論において規則が重要である (cf. 今田 1986: 221)。また、社会的過程をコントロールする規則 (法, 規範, 制度) という實在に注目すれば、社会の實在を仮定する必要がなくなる (今田 1986: 251)。そして今田が提示する自己組織性理論および自省的機能主義では、構造による行為のコントロール、行為による構造の変動、いずれも意味を媒介するものとして捉えられており、規則と行為を媒介する「意味」というこの構図は Wittgenstein の規則論から得られている (今田 1986: 264-86)。

このように Wittgenstein の規則論が、自己準拠性や自己組織性の理論として意味システム論へ取り入れられている。社会の理論研究では伝統的に、社会性の核心としての社会構造と行為主体の二項対立が常に問題となってきた。後期 Wittgenstein の思想はこの二項対立を意識的かつ明確に乗り越えるものとして利用されてきており、最も顕著なのがこの意味システム論の立場である。この立場は後述する実践と再生産の理論と対比できるため、そこで再び振り返

ることにはしたい。

2.3 言語ゲーム論

後期 Wittgenstein 思想を最も直接的に社会学理論に結びつけたのは橋爪の研究である。特に彼の『言語ゲームと社会理論』は、日本理論社会学における Wittgenstein 受容を長年大きく方向づけてきた。橋爪は Wittgenstein についての社会学研究としては最も広範な考察を行ったが、それゆえに厳密な解釈としては不十分に思える点も多々見られる。だが解釈問題よりも利用法に焦点を当てる本稿にとっては、それら一連の考察を纏めて橋爪が「言語ゲーム論」を取り出したのが何よりも重要である（橋爪 1985, 2006, 2009）。

橋爪によれば後期 Wittgenstein は、伝統的な主-客図式や世界-言語図式を超越して、「言語ゲーム一元論」を提唱した。世界の一部である言語は我々の営みすべてに関わり、言語ゲームは世界を上回る至高の現実性として主体も客体も生み出す母体とされる（橋爪 1985: 34-8）。だが同時に言語ゲームは超越的な審級を持たず全て同等かつ不定型であり、その全貌を語ることは困難とされる（橋爪 1985: 38-59）。Wittgenstein 自身は言語ゲームを理論的・積極的には語っていないと橋爪は認めるが、そこに秘められた「超テキスト」の浮上を試み次のように纏めている。(1) 我々の挙動動作は何らかの言語ゲームであり、社会はそのような数多の言語ゲームの渦巻きである。言語ゲームは端的な事実性である。(2) 言語ゲームについて対象化的・帰納的に言及することはできない、なぜならその試み自体が別の言語ゲームだから。(3) 個々の言語ゲームの記述は出来るが、その記述はもとの言語ゲームと区別される新たな言語ゲームであり「論理学」と呼ばれる。(4) 論理学は、記述される言語ゲームの規則性を明示化するが、それは当該言語ゲームに根拠を与えるわけでも、それを規定するわけでもなく、論理学の有無にかかわらずもとの言語ゲームの効力は同じである。以上は、言語ゲームが遂行的 (performative) な事態だという事実に基づく特性である（橋爪 1985: 65-6）。総じて、「〈言語ゲーム〉には、端的に言って〈外〉がない」（橋爪 1985: 67）とされる。

言語ゲーム論は他の立場に比べて構造主義的である。普遍的・不変的な構造を否定してその多元性や複合性を強調し、根元的な根拠や超越的視点は退けられているが、一種の不可避の檻として言語ゲームは理解されており、特に橋爪（1985）はその傾向が顕著である。だが後に、いかなる言語ゲームも外的視

点から眺めることができるという相対主義と、人間は必ず何らかの言語ゲームに属し全ての言語ゲームの外へ出ることは不可能であるという絶対主義がペアにされ、Wittgenstein は相対主義者でも懐疑主義者でもないとして修正されている(橋爪 2009: 252)。

言語ゲーム論は理論というよりも思想や観点に近いが、日本の理論社会学に多大な影響を与えてきた。例えば盛山は、ルールを語る際に社会理論が直面するのは「ルールに内属しないでルールを理解し分析することはいかにして可能か、という問題」(盛山 1995: 151)であり、橋爪の言語ゲーム論はそれを不可能と考えていると主張し、そのうえで盛山は外的行動や内的過程などの「行動的實在」から区別される「理念的實在」としてルールを把握する道を提案している(盛山 1995: 161-9)。言語ゲーム論から提起されるこのような問題は、解答や態度の違いこそあれ、他の立場も共有していると思われる。

2.4 他者とコミュニケーションの理論、間主観性論

後期 Wittgenstein からコミュニケーション論、他者論、間主観性論を引き出す立場もある(e.g. 大澤 1994; Crossley 1996=2003)。この立場は、規則に私的に従うことはできないという点を重視する。代表として Habermas (1988=1990) の理論を見よう。

Habermas は規則に私的に従うことは出来ないというテーゼに注目し、そこから他者との了解という発想へ移行している。彼は Wittgenstein の規則遵守概念の分析を次のように解釈した。言語表現がある主体にとって同一の意味を持ちうるのは、その主体が少なくとももう一人の主体と一しょに双方に妥当する規則に従うことができる場合に限られ、規則に私的にしたがうことができないのと同様にモナ的に孤立化した主体は表現を意味同一的に使用することができない(Habermas 1988=1990: 145-6)。そして Wittgenstein は世界と言語の関係とは別に意味と妥当の内的関係を導入した。つまり、意味慣習の妥当性を慣習や制度の社会的妥当になぞらえ、言語ゲームの文法規則を社会的な行為規範に同化することで言語ゲームを超越する妥当性は放棄され、発言の妥当性はそれが属する言語ゲームにのみ準拠するとされたのである(Habermas 1988=1990: 146)。

そしてこの解釈は Habermas 自身の言語観とコミュニケーション論に接続される。「われわれが発話行為を理解するのは、それを受容可能にするものを知

っているときである」(Habermas 1988=1990: 157)。こうして合意や了解が言語の構造的契機として組み込まれる。「言語構造に内在する了解という最終目的」(Habermas 1988=1990: 162) という表現が典型である。Wittgenstein は言語ゲームの多様性 (とそれに基づく言語機能の多様性) を提起したが、Habermas はさらにそれらの最終目標に了解を位置づけたのである。その根柢には、理由としての言語という考えがある。「われわれが発話行為を理解するのは、話し手が、自分の発言に対して妥当性を要求するのは当面の状況では至当であると聞き手を納得させるために、挙げるであろう理由の種類を、われわれが知っているときである」(Habermas 1988=1990: 158)。言語は理由の体系として把握され、理由の言語ゲームがコミュニケーションと言語の根幹と見なされている。

この立場は概念分析や意味システム論などとは異なり、不動点となる要素 (言語、了解) を求める傾向にある。あるいは、意味システム論の行為者視点からの基礎付けとして捉えることもできるだろう。

2.5 実践と再生産の理論

自己準拠性や自己組織性などが Wittgenstein と密接に関連していることは見た。それと近い異なる着眼点をもつ Giddens と Bourdieu の理論を見よう。

Giddens は Wittgenstein に基づき、規則を社会システムの再生産の媒体かつ結果、実践の生産と再生産の媒体と見なした (Giddens 1979=1989: 70-2, 215-6)。Wittgenstein による規則の分析が明らかにしたのは相互行為の組成において規則にたよる際の様式であり、「つまり、規則を知ることは、規則が適用される《コンテキスト》を知ることも含め、規則の抽象的定式化を供給することではなく、新たな状況にたいして規則を適用する方法を知ることである」(Giddens 1993=2000: 215)。こうして Giddens は意味と道徳の領域における生産と再生産のありかたを示すものとして規則論を利用している。だが、Wittgenstein やその追従者の議論では資源や権力、制度の変容、慣習の起源などが論じられないと批判もしている (Giddens 1993=2000: 96-7, 100-1, 104, 137, 214-5)。つまり Giddens にとっての「システム」や「実践」は、意味システム論などに比べて物質的・自然的な諸要因により重きが置かれているのである。ここまで見てきた諸見解との大きな違いがここにある。ただし生産と再生産の再帰的過程と Wittgenstein の規則論を重ねていることは共通している。

Bourdieu の Wittgenstein 援用法は必ずしも明確ではないが、客観主義的・構造主義的に規則を把握することの困難を示すものとして引用している (Bourdieu 1980=1988: 37, 60-1)。だが Bourdieu 自身は社会現象学などの主観主義的立場の限界も合わせて考慮したうえで実践とハビトゥスの理論へ繋げ、身体性や客観的な生存諸条件に着目している。つまり意味や象徴の次元にとどまるのではなく、慣習と実践の次元まで降りることを Bourdieu は試みている。

意味システム論も実践と再生産の理論も、「主観／客観」「行為／構造」について、前項(主観と行為)の創造性を非恣意的なものに止め後項(客観と構造)の拘束性を弱めることで両者の調停を図っている。その懸け橋となる第三項が「自己準拠」や「再生産」である。だがそこからはふたつの道がある。二項図式を退けてもなお、構造の方に準拠してシステム論を修正するという道と、行為の方に準拠してその背景にある資源や身体、権力関係などに注目する道である。意味システム論が意味(ないし主体的創造性)の自律性を重視するがゆえにそこにシステム性を見るのに対し、実践の理論は意味に対する外的制約に着目するがゆえに、実践を取り巻く周辺要因の変動を見るという点に違いがある。二項図式が複合的に錯綜している。単純化すれば、システム論は主観主義化し、行為論は客観主義化しているのである。だが共通しているのは、自己準拠そのもの、再生産や実践そのものを対象として語ることが困難だという認識である。「陰画的な語り口をとらずに実践について語るのは難しい」(Bourdieu 1980=1988: 128)。ゆえに積極的な試みとしてシステムの記述や客観的諸条件への着目が選択されている。これが、慣習としての規則遵守、実践としての規則遵守という Wittgenstein の主張から導かれたものである。

2.6 自然主義・プラグマティズム

最後に、おそらく傍流に位置するが本稿が注目する立場を検討する。ここでは「自然主義」というラベルを用いる。これは実践と再生産の理論をさらに極端化したものと理解できる。

まず整理しておこう。一口に「自然主義」と言ってもその定義は明らかではない。たしかに Wittgenstein の自然への着目は彼の後期思想の随所に見られる。例えば、「矢印が何かを指すのは、生き物によって使われるときだけだ」(PU 454) という主張は、規則遵守問題の一事例である、矢印の解釈についての無

限後退の議論 (PU 85-6) へのひとつの解答にも思える。そして特に印象的なのは次の文言である。

我々がここで提供しているものは、実は人間の自然誌についてのコメントなのだ。とはいえ風変わりな貢献をしているわけではなく、誰もが疑ったことのないことを確認しているのである。ただ、それが気づかれなかったのは、いつも目の前にあるからにすぎない。(PU 415)

こうした主張もある以上、Wittgenstein の後期思想では言語使用や論理、規則遵守の基礎に自然が置かれているという理解は決して珍しいものではなく、むしろ立場を超えた共通理解だと思われる。ゆえにあえて「自然主義」解釈と呼ぶならば、それは特定の仕方自然を強調していることになる。例えば、特定の問題 (e.g. 哲学的問題) に対する解答として超自然的 (supernatural) な要因ではなく自然的要因を持ち出すことが自然主義の特徴と言える (cf. Hookway 2017)。そのため、後期 Wittgenstein 解釈には大別して懐疑主義的解釈と反懐疑主義的解釈の2つが区別できるが、自然主義は一般に懐疑主義的解釈の側に含まれることが多い (cf. Lynch 1993=2012: 5章)。そして自然主義解釈の代表としては McGinn が挙げられる。McGinn は認識論的懐疑の解消として自然を持ち出す。「彼 [ウィトゲンシュタイン] の見解では、(言葉の場合) 記号に関するわれわれの実践や慣習を支えているのは、訓練と結びつけられた人間の自然本性である」(McGinn 1984=1990: 124)。他にも Bloor は、Wittgenstein の思考の社会学的側面と自然主義的側面を重視するとして、自然主義的側面について次のように言う。「信念、言語、推論、行為に対する彼の考察態度はこれらを自然現象として扱うことである。つまり、これらがどのように、物質的、生物的、文化的背景に根差した人間の行動から生じてくるかを示すことによって、これらを理解することが目指されている」(Bloor 1983=1988: 3-4)。以上の指摘を踏まえ、「自然主義」というラベルこそ用いていないとしても、そこに属すると思われる社会学者の見解を見てみよう。

代表として、日本社会学で Wittgenstein に言及した嚆矢である清水 (2000) に触れよう。まず清水は Wittgenstein の思想の前期と後期に関して、「あまり長くもない生涯において、分析から生命への転回が行われたように思われる」(清水 2000: 244) と述べている。では清水は『探究』をどう受け止めたのか。

清水はまず、『探究』で子供について頻繁に論じられていることに注目する。「子供の問題を正面から論じることによって、彼は、哲学の歴史から自分を切り離れた」(清水 2000: 250)とされる。また清水は Sprachspiel の訳語に language-game や「言語ゲーム」を当てることに不満を示している。なぜなら Spiel には「活動」という含みや感じがあるのに game ではそれが失われてしまうから(清水 2000: 268-9)。ここに清水の視野の広さが伺える。他にも、「ワイトゲンシュタインにとって、語り得ぬものは大海であり、語り得ぬものは、この大海に浮かぶ島であった」(清水 2000: 281)と指摘され、語り得ぬものへの注意が促されている。実践を語ることの難しさにはすでにふれたが、それも含めた語り得ぬことに清水は目を向けている。そして最終的に清水は Wittgenstein に「プラグマティズム」を認めた。「プラグマティズムは、大いなる自然のうちに生きる一個の生物として人間というものを考え、この生物が環境に対して試みる適応の様式として思考というものを考える」(清水 2000: 291)⁵⁾。これは明らかに上述の Bloor などの自然主義と近い。

自然主義はまだ精緻化には乏しいものの、自然や生物という言語ゲームの外部を重視している点で特徴的である。本稿が注目するのはこの立場である。なぜかを以下考察しよう。

3 考察：自然と意味、説明と記述

大別して6つの立場を見てきた。社会学者が後期 Wittgenstein に興味を持つ論点には大きな違いはないが、着眼点と利用法に違いが現れる。

まず大枠としての共通点が、「行為／構造」「主観／客観」などの二項対立の超克であり、多くの場合その軸が実践概念である。そして共通の論点は以下の3つに分かれる。(1) 緩い規則観：規則と実践は相互関係にある。つまり実践は構造によって完全には決定されないが、構造を恣意的に変化させるわけでもない。(2) 実践の文脈依存性、及び文脈の多様性と複雑性：実践は慣習に依存しつつそれを変更し得るが、慣習は動的かつ多元的であり把握が難しい。

(3) 意味と自然の区別：考察対象は意味・概念か、それとも自然・因果か区別せねばならない。例えば、「規則に従う」という概念が問題なのか、規則と結びついた行動が問題なのか、など。

どれも論点としては共有されているが、(1)は規則と実践のどちらに重きを置くかの選択を迫り、(2)は理論／方法の区別を生み、そして(3)はそのまま意味／自然の区別を提示する。理論／方法の区別は、規則に関する考察を社会秩序論や間主観性論、社会システム論の補強として利用する立場と、論理分析・概念分析の方法として利用する立場を対立させる。両者を繋げようとする試みもあるが(小宮 2011)、概して前者は後者の視野の狭さを批判し、後者は前者の余分さを批判する傾向にある (cf. Giddens 1993=2000; Winch 1990=1977)。この対立は、慣習的实践という局所的・動態的・時間的対象の理論化の困難に由来している。そして理論化を試みるとしたらその対象は意味の秩序かそれとも実践を取り巻く自然かによってさらに分岐し、意味／自然の区別に繋がる。

意味／自然の区別に関して、前節で見た立場の大半は、意味や概念の秩序、規則を自然的な事象から区別し前者にのみ注意を払う傾向にある。言語ゲームの外部や規則の外部はあまり考察対象にならない⁶⁾。外部に注目しているのは、自然主義と実践・再生産の理論である。自然主義は、自然の中の生物として人間を考察することから始める。すると対象になってくるのは、すでに秩序だった言語ゲームではなく、動物的な環境への適応、前思考的な因果把握、さらに子供の学習などである⁷⁾。本稿では踏み込めないが、実際 Wittgenstein 晩期思想では自然や因果、人間の動物性に関する議論が前面化してくる⁸⁾。基盤や背景としての自然への洞察は Wittgenstein 利用においてほぼ共通了解と述べたが、自然主義は自然そのものを研究対象にする。意味秩序や概念連関に注目するとき自然は背景に退きがちだが、それは社会学研究の対象として自然が排除される根拠にはならない。

だがそれでも社会学における自然主義利用はまだ明確ではない。ここで、何らかの問題の解答として自然的要因を持ち出すという自然主義の特徴に注目すると、「記述／説明」の区別が浮上してくる。Wittgenstein の自然主義を他の立場から区別し、さらに社会的に豊饒化させるためには、それが自然や因果を対象としながら、特定の問題に関し説明的なものと見なすべきである。そう考えると、自然主義以外の立場は記述に大きく傾いているものばかりである。そして自然への着目という点で、自然主義は Giddens や Bourdieu と少なからず協調路線にあるが、その袂を分かつのがこの説明という特徴である。第一に、概念分析のように具体的な方法論まで昇華しているならばともかく、実践

と再生産の理論などは後期 Wittgenstein から二項図式を克服する循環図式や相互関係図式を引き出すことが核心にあるが、それだけでは実りが少ない。特に後述する「分析社会学」の視点から言えば出発点に戻るだけだと言ってしまう (cf. van den Berg 1998: 232-3)。あるいは社会学史的にも〈社会化〉などの用語で片づけられてしまいかねない。第二に、彼らは自然的諸要因にも着目しているが、そこから何かを説明するというよりは、直ちに権力や支配の問題に論点を移す傾向にある。実践と再生産の理論も結局は説明的ではない。

自然主義は実践の理解や記述よりも説明を試みる。自然主義以外は規則と実践の相互関係を持ち出して終わるのに対し、自然主義は規則と実践の相互関係が成立するプロセスを捉えようとする。だからこそ、「子供」や「動物」「訓練」などが重要視されるのである。

以上で図式的な整理と考察は行った。次に Wittgenstein の自然主義を、似た志向を有する社会学の一潮流と結び付けたい。

4 展開：社会的メカニズムの説明

本節では、或る社会学的な問いや目的に照らして自然主義解釈が有益であると論じる。

Wittgenstein の自然主義は社会学で主流になっていない。それは既存のアプローチ (理解社会学, エスノメソドロジー, 社会システム論など) の中に自然主義と接続しうるものが見当たらなかったのも大きな理由だと考えられる。そこで取り上げたいのが、近年注目されている分析社会学 (analytical sociology) である (e.g. Hedström & Udehn, 2009=2011)。分析社会学もまだ体系化されていない発展途上の分野だが、その紹介と評価を試みた打越 (2016) の貴重な研究があるため、ここではそれを参考にしたい。

打越の整理によれば分析社会学は、(1) 記述よりも説明を重視し、特に社会現象のメカニズムの説明を試み、(2) 複雑な社会現象を分解・抽象化し、(3) 分析単位として行為と相互行為を用いて社会現象を説明するマイクロ・マクロ・リンクのアプローチを採用する。そしてこの分析社会学は、高度な計量分析による大量社会調査の「変数主義」に対して、変数間の関係だけでは社会現象の因果的生成プロセスがブラックボックスのままと批判する中で登場した (打

越 2016).

本稿の提案は、社会現象の因果的生成過程というブラックボックスを説明する上で、自然主義が有益ということである。これは決して強引な結合ではない。まず、分析社会学のマイクロ・マクロ・リンクアプローチは、社会的文脈による影響からマクロな社会的アウトカムが生じると考え、その過程を行為と相互行為から説明するが、この図式は Wittgenstein の思想と対立せず、むしろ規則と実践の相互構成過程を因果的視座から再構成するものと理解できる。

そして、分析社会学が用いる行為論は、Wittgenstein の自然主義を用いて精緻化できる。分析社会学の基礎となる DBO 理論は、欲求：行為達成への個人の動機、信念：真である世界に関する命題、機会：複数のあり得る行為の中で提供されている選択肢、これら全てが満たされたとき行為が生ずると説明する。これは行為論の模式図であり、行為の基礎としてどの要因が強調されるかは各々の経験的研究によって異なるという（打越 2016: 295）。

まずこれを Wittgenstein の自然主義と結合すると、機会と欲求が強調される。その基準となるのは外部からの観察可能性である（例。当事者への質問が必須か否か）。自然主義は人間本性と物的環境を外的に観察するからである。物的環境を含む機会は最も外的に観察しやすい。欲求は原初的なものであれば外部からも判断が可能である（例。食欲）。しかし信念は外的観察者の視点からの直接の把握は難しい。そのためまずは信念以前の欲求と機会に注目することになる。

他方、分析社会学が想定しているよりも、信念や一部の欲求に基づいた行為把握を「因果的説明」と素朴に見なすことは難しい。Wittgenstein 解釈の文脈でそれらは「意味的理解」に相当する。因果的説明を求めるならば、機会と欲求を軸としつつ、出来事の継起の把握が必要である。そのような因果的説明では行為の意味同定が度外視されるという問題も生じるが、むしろ行為当事者視点の意味同定を離れることにこそ、自然主義の意義があると思われる。そうすることで、当事者が把握していない「意図せざる結果」を明らかにすることができる。

このような結合のひとつの足掛かりとして貨幣がある。言語と同型のメカニズムであり、かつより具体的・物質的であり、さらにはマイクロとマクロのリンクをより如実に示す。現代では言語と貨幣の関係性が頻繁に論じられており、貨幣研究でも Wittgenstein が引かれている（e.g. 柄谷 1992; 岩井 1998）。

そこでは“貨幣が交換手段としての貨幣足りえるのは、貨幣が実際に流通・交換されるからだ”という循環論法を導いている。これは規則遵守の実践説の一適用である。その一方で、分析社会学の目指すべき理想のひとつとして、当初の誤った信念がゆくゆくはその誤った信念を真実にする行動を引き起こすプロセスを論じた「予言の自己成就」理論が挙げられている (Hedström & Udehn, 2009=2011: 80-1)。単純化すれば、規則遵守の実践説は、予言の自己成就プロセスの抽象的なモデルである。しかしただ「循環」として捉えるだけでなく、その端緒に注目することが自然主義の利点である。実際、Wittgenstein 自身は、言語の神秘性や内面との強い結びつきを緩和するために、より物質的で外的な貨幣を持ち出した。それを敷衍すると、貨幣の価値ではなく具体的な交換過程に、言語の意味ではなく実際の使用状況に目を向け、物理過程として観察することになる。例として、Winch が批判した Weber の語り方が参考になる。工場で賃金を受け取りそれで支払いをする労働者について語る代わりに、金属片を受け取りその金属片を他の人に渡し彼らから他の物品を受け取る人々について語るのである (Winch 1990=1977: 145)。この考察をさらに展開すれば、貨幣や言語の生成・作動メカニズムを物的に理解できる。

分析社会学と後期 Wittgenstein の自然主義を結び付ければ、言語ゲームの生成プロセスの社会学研究に繋がると考えられる。たとえそれが哲学者 Wittgenstein の目論見とは異なるとしても、Wittgenstein の思想は、社会的メカニズムの探究として伝統的な社会学研究と結びつけることができるのである。分析社会学は、行為を軸にした社会的メカニズムの説明および社会現象の因果的生成プロセスの解明を目指した枠組や分析概念を準備し、そしてコンピュータシミュレーションなどの様々な分析方法との接続可能性を提示している。しかし、主に分析概念の面で〈Wittgenstein 以後〉の流れを汲み取っていない。「意味／自然」などの区別を用いてさらに分析概念を整備しなければ、説明や因果的生成プロセスの解明は困難である。換言すれば、分析社会学の概念はまだ「行為」と「言語ゲーム」の理論に属しており、言語ゲームの根柢にある「実践」や「生の形式」を分析するものではない。だからこそ、まだ粗削りだが実践や生の形式を自然の面から重視する Wittgenstein の自然主義が有益なのである。だが同時に、こうした分析社会学の視座を軸にした再解釈・再検討によって、Wittgenstein やその自然主義解釈の研究から、言語ゲームの生成プロセスを説明する手掛かりがより明確な形で得られることが期待できる。

後期 Wittgenstein は普遍的・超越的な視点を否定する。その点、中範囲の理論と親和的とされる分析社会学は軌を一にしている (cf. Hedström & Udehn, 2009=2011)。しかし中範囲の理論は一般理論・普遍理論を必ずしも否定してはいない。そして Wittgenstein 以後、概念や意味に注目する限り普遍的なシステムやメカニズムを措定するのは不適切とされているが、結論を出すためには因果性の再検討が要請される。意味や概念の記述を推奨する立場は因果性を強く解しており、それは計量社会学や分析社会学が理解する因果性とどれほど一致するのかが大いに議論の余地があるだろう。その結果に応じて、本稿の立場が計量研究といかに結びつくのかも変わっていくことになる。

5 おわりに

後期 Wittgenstein の援用法から見えてくる現代の社会学理論・方法論の多くが共有している欠点、それは社会現象の因果的メカニズムがブラックボックスになっていることである。これは分析社会学の観点から言える。そして Wittgenstein の自然主義解釈を社会的に具体化する上で分析社会学・メカニズムの説明の視座は有望であり、他方で分析社会学が Wittgenstein を利用しようとするならば、その自然主義解釈が有益である。

注

- 1) 例外もいる。例えば多田は前期『論理哲学論考』の独我論が構築主義的認識論に近いとして、Luhmann との関連性を示唆しつつ評価している (多田 2013: 75.n.15)。逆に、後期は言語という相互主観性を所与にしている、と批判的である (多田 2013: 296.n.22)。『論考』の再評価には首肯できるが、後期についての多田の評価は一面的であり、議論の余地がある。
- 2) 『探究』は PU と略記し参照箇所は節番号で記した。また、邦訳も参照した場合、訳文は必要に応じて変更している。
- 3) Wittgenstein 解釈と結びついた Luhmann 解釈をめぐる論争が小宮 (2011) と佐藤 (2000, 2008) の間に生じた。小宮陣営としては北田 (2017)、佐藤陣営としては馬場 (2001) も参照。
- 4) 言語ゲーム論のひとつの展開である志田 (1989) は、言語ゲームの転化や内的視点から外的視点への転化を自我の能動的作用と捉え、言語ゲーム論に自我論を組み込む試みである。

- 5) 他にも、「能力」を軸に発展させようとする研究がある(岸 1994). 岸は「能力」や「技術」を重視する McGinn (1984=1990) に影響を受けている.
- 6) 例外として中野は, ゲームのルールを支えるゲームの外部を重視している(中野 1997: 129n. 14, 2006: 27-8). 中野の関心が「システムの生成」にある点も本稿と親和的である.
- 7) 哲学的因果説を後期 Wittgenstein の核心と解釈した黒田亘の研究は本稿の主張の補強となる. 彼の Wittgenstein 解釈(1983)は試論的性格が強いものの本稿の考察が向かう先を示唆している. さらに Wittgenstein 解釈からは少し逸脱するが, Millikan (1990) や Schlosser (2011) も本稿と親和的である.
- 8) 自然主義の立場ではないが晩期思想の研究としては山田(2009)が重要. 晩期思想の理論社会学的再検討は今後の最重要課題となる.

文献

- 馬場靖雄, 2001, 『ルーマンの社会理論』勁草書房.
- Bloor, David, 1983, *Wittgenstein, a Social Theory of Knowledge*, The Macmillan Press. (戸田山和久訳, 1988, 『ウィトゲンシュタイン: 知識の社会理論』勁草書房.)
- Bourdieu, Pierre, 1980, *Le Sens Pratique*, Minuit. (今村仁司・港道隆訳, 1988, 『実践感覚 I』みすず書房.)
- Coulter, Jeff, 1979, *The Social Construction of Mind*. (西阪仰訳, 1998, 『心の社会的構成』新曜社.)
- Crossley, Nick, 1996, *Intersubjectivity*. (西原和久訳, 2003, 『間主観性と公共性』新泉社.)
- Giddens, Anthony, 1979, *Central Problems in Social Theory*. (友枝敏雄ほか訳, 1989, 『社会理論の最前線』ハーベスト社.)
- , 1993, *New Rules of Sociological Method*, 2nd edition, Polity Press. (松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳, 2000, 『社会学の新しい方法規準(第二版)』而立書房.)
- Habermas, Jürgen, 1988, *Nachmetaphysisches Denken*, Suhrkamp. (藤澤賢一郎・忽那敬三訳, 1990, 『ポスト形而上学の思想』未來社.)
- Hedström, Peter & Udehn, Lars, 2009, “Analytical Sociology and Theories of the Middle Range,” Peter Hedström & Peter Bearman eds., *The Oxford Handbook of Analytical Sociology*, Oxford University Press. (久慈利武訳, 2011, 「分析社会学と中範囲の理論」『人間情報学研究』16(71): 71-90.)
- 橋爪大三郎, 1985, 『言語ゲームと社会理論』勁草書房.
- , 2006, 「言語派社会学の理論構成」『社会学評論』57(1): 109-124.
- , 2009, 『はじめての言語ゲーム』講談社.
- Hookway, Christopher, 2017, “Wittgenstein and Naturalism,” Hans-Johann Glock & John Hyman eds., *A Companion to Wittgenstein*, Wiley Blackwell.
- 今田高俊, 1986, 『自己組織性』創文社.
- 岩井克人, 1998, 『貨幣論』筑摩書房.
- 柄谷行人, 1992, 『探究 I』講談社.

- 河村賢, 2013, 『「ルールに従うこと」はいかにして記述されるか』『現代社会学理論研究』7: 80-93.
- 岸政彦, 1994, 「規則と行為」『ソシオロギス』(18): 149-167.
- 北田暁大, 2017, 「他者論のルーマン」『現代思想』45(6): 202-219.
- 小宮友根, 2011, 『実践の中のジェンダー』新曜社.
- Kripke, Saul A., 1982, *Wittgenstein on Rules and Private Language*, HUP.
- 黒田亘, 1983, 「ヴィトゲンシュタインと因果」黒田亘, 1992, 『行為と規範』212-233, 勁草書房.
- Luhmann, Niklas, 1993, *Das Recht der Gesellschaft*, Suhrkamp. (馬場靖雄他訳, 2003, 『社会の法1・2』法政大学出版社.)
- Lynch, Michael, 1993, *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*, Cambridge Univ. Press. (水川善文・中村和生監訳, 2012, 『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』勁草書房.)
- 前田泰樹, 2005, 「行為の記述・動機の帰属・実践の編成」『社会学評論』56(3): 710-726.
- McGinn, Colin, 1984, *Wittgenstein on Meaning*, Basil Blackwell. (植木哲也・塚原典典・野矢茂樹訳, 1990, 『ウィトゲンシュタインの言語論』勁草書房.)
- Millikan, Ruth Garrett, 1990, “Truth Rules, Hoverflies, and the Kripke-Wittgenstein Paradox,” *Philosophical Review*, 99(3): 323-353.
- 中野昌宏, 1997, 「自己と貨幣における「せき立て」の機能」『ソシオロギス』21: 113-131.
- , 2006, 『貨幣と精神』ナカニシヤ出版.
- 大澤真幸, 1994, 『意味と他者性』勁草書房.
- 佐藤俊樹, 2000, 「『社会システム』は何でありうるのか」『理論と方法』15(1): 37-48.
- , 2008, 『意味とシステム』勁草書房.
- Schlosser, Markus E., 2011, “The Metaphysics of Rule-Following,” *Philosophical Studies*, 155(3): 345-369.
- 盛山和夫, 1995, 『制度論の構図』創文社.
- 志田基与師, 1989, 「自我とゲーム」『ソシロギス』13: 219-231.
- 清水幾太郎, 2000, 『倫理学ノート』講談社.
- 多田光宏, 2013, 『社会的世界の時間構成』ハーベスト社.
- 打越文弥, 2016, 「分析社会学の理論構造」『理論と方法』31(2): 293-303.
- van den Berg, Axel, 1998, “Is Sociological Theory too Grand for Social Mechanisms?” Peter Hedström & Richard Swedberg eds., *Social Mechanisms*, Cambridge University Press.
- Winch Peter, 1990, *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*, 2nd edition, Routledge & Kegan Paul. (森川真規雄訳, 1977, 『社会科学の理念』新曜社.)
- Wittgenstein, Ludwig, 2009, *Philosophische Untersuchungen / Philosophical Investigations*, G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker & J. Schulte, trans., 4th edition, Wiley-Blackwell.
- 山田圭一, 2009, 『ウィトゲンシュタイン 最後の思考』勁草書房.
- (むなかた とうま・首都大学東京大学院 博士後期課程)

Toward Explanations of Practices and Social Mechanisms: A Reconsideration of the Sociological Significance of Wittgenstein's Later Thought

Toma Munakata

Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University

Ludwig Wittgenstein presented an interesting idea “language-game” and a famous problem: No course of action can be determined by a rule. Especially this “rule-following problem” has been commonly recognized as one of the most important issues in sociology as well as philosophy. In fact, most of the famous sociologists have referred to Wittgenstein's later thought, depending on their subjects and interests. In other words, the contemporary sociological theories are more or less based on Wittgenstein.

This paper attempts to reconsider the sociological significance of Wittgenstein's later thought by examining how sociologists have understood and used his thought. I intend to develop new perspective derived from naturalistic interpretation.

First, I briefly survey Wittgenstein's later thought focusing on “language games” and “rule-following problem.” Second, I examine the previous sociological studies on *Philosophical Investigations*, particularly on “rule-following problem.” I divided these studies broadly into six types: (1) methods of concept analysis, (2) theories of system of meaning, (3) theories of language-game, (4) theories of communication and otherness, (5) theories of practice and reproduction, (6) naturalism. There are three common issues: (a) mutual relation between practice and rule, (b) plurality and complexity of the context of practice, (c) distinction between meaning and nature. Third, I focus on naturalism and attempt to develop sociological theory derived from it. Based on naturalistic reading, Wittgenstein analyzed rules and life thoroughly and finally arrived at human nature. Therefore, the possibility of deriving a new sociological theory from naturalism of Wittgenstein's thought is based on “life” and “nature,” not “language-game.” Finally, I suggest that a new sociological theory derived from naturalism of Wittgenstein's later thought can be based on analytical sociology. By this theory, we will attempt to explain the natural and causal mechanisms.

Keywords: Wittgenstein, naturalism, social mechanism